

ワイド版 三字名句墨場必携

ワイド版 三字名句墨場必携

一九九八年四月二十五日 初版発行

編者 木耳社編集部

発行者 田中秀人

印刷 榊平河工業社

製本 榊水興舎

発行所 株式会社 木耳社

〒100-0001

東京都千代田区三崎町三十二-19

電話 〇三-五二七六-九〇〇

営業部 〇三-五二七六-九〇〇

FAX 〇三-五二七六-九〇〇

〇三-五二七六-九〇〇

ISBN4-8393-2707-6 C2071

木耳社編

名句墨場必携(全12巻)

古典・仏典・詩文等の中から、一般によく知られた名句を選び、中国・日本の名跡より集字し解説を付した臨書倣書の好ハンドブック。



各巻共通

小B6判 二一六頁 本体一六〇〇円

- | | |
|------------------|------------------|
| * 一字名句墨場必携 | * 五字名句墨場必携 ■ 四季篇 |
| * 二字名句墨場必携 | * 五字名句墨場必携 ■ 仏語篇 |
| * 二字名句墨場必携(続) | * 六字名句墨場必携 |
| * 三字名句墨場必携 | * 七字名句墨場必携 ■ 四季篇 |
| * 四字名句墨場必携 ■ 四季篇 | * 七字名句墨場必携 ■ 仏語篇 |
| * 四字名句墨場必携 ■ 仏語篇 | * 八字名句墨場必携 |

別冊 名句墨場必携—総索引(本体四八五円)

セット定価
(本体18545円+税)
(分売可)

* 定価は変更する場合があります *

ワイド版 三字名句墨場必携

木耳社編

『ワイド版 名句墨場必携』はご好評を頂戴している普及版(小B6)をご利用のお客様より、「お手本として使いやすいように、ひとまわり大きな版が欲しい」とのご要望が多く寄せられ、刊行の運びとなりました。

従来のシリーズと同様、皆様の書作品やお手本づくりのお役に立てれば幸いです。

木耳社編集部

は し が き

本書は、漢字の『三字句』を対象として編集しました。

三字句の作品は、主として長方形の料紙に揮毫されることが多いので、これを意識して集字を試みました。勿論、色紙など方形のものに書かれることもあります。これには、揮毫される方々の任意の参考資料としてご活用戴ければ幸甚です。

なお、作品は一つの字句に対し、縦二横一の三点を配しましたが、横に配置した作品の中に、文字相に合わせ一部左から右に配置されたものもあります。ご承知置き下さい。

このシリーズのモットーである「集字した作品が出来るだけ原碑・原帖の雰囲気損なわないように心掛ける」ことには万全を期しましたが、そのため一部の碑帖に偏り、また、偏旁冠脚を組み合わせて作字したものもあります。ご容認下さい。

凡 例

解説については、その表現をだれにでも理解しやすいようにつとめました。その要領はおよそ次のとおりです。

一 字句の表示は、常用漢字とし正字があるものは傍らに（ ）してこれを掲載しました。読みについては ①音読を主体とし、訓読（日本読み）を併記しました。また、

②文章体で 訓読 のみを記したものもあります。

二 字句の出典は、出来る範囲でこれを掲載しました。また、出典にこの字句の含まれる文章の判明している場合、理解の一助とするためこれを載せ、訓読を傍記しました。

三 字句の解説は、通解としその要点のみを述べることにしました。

四 説文については、各字個々の読み、六書区分と音義、要点のみを記載しました。

五 作品の書品解説については、①②③を凶版の縦右・縦左・横、または横・縦右・縦左の順に並べ、それぞれ用筆、筆意、作風、時代相などを思い付くままに述べ、作品制作のヒントにしました。趣意・表現についてはあくまでも筆者の個人的考察であり、利用される方の意に添わぬ場合があるかも知れません。お含みの上ご活用ください。

図版の配置は、原則として古文、楷書、行草書の順としました。三点の中に採字の関係で全書体を含まない場合もあります。

一 中国の作品は、殷周から明清まで出来る範囲での採字を心掛けました。

二 日本の作品は、奈良・平安から江戸までの漢字作品から採字をしました。

三 行草書における文字の連綿は、出来るだけ無理のない範囲で配置を試みました。

四 偏旁、冠脚を組み合わせて作字したものは、原則として ㊦ を付しました。

五 図版に用いた文字の出典については、「古典碑帖一覽」をご参照ください。

用語については、原則として次に統一して使用しました。

合字 それぞれ個々の意をもつ偏旁冠脚を、組み合わせて一つの文字として構成すること
とをいいます。

音義 その文字の持つ 音 により派生して用いられる言葉の意義をいいます。

延伸 文字本来持っている意味が、敷衍し延長されてそれに関連した意を生ずること。

このほか、書道的表現として古来用いられている語句の一部を、現代に調和した表現に変えたものもあります。

編集責任者 吹野 太楚

はしがき	3
凡例	4
出典一覧	8
阿伽陀	12
案山子	14
意清浄	16
一字師	18
一抔上	20
畏天命	22
雨木冰	24
雲從龍	26
越石見	28
王者香	30
鶴聽碁	32
学遜志	34
花竹秀	36
我忘吾	38
看脚下	40

觀自在	42
甘露法	44
歸去來	46
喫茶去	48
虚空海	50
虚受人	52
玉壺冰	54
金石交	56
君子林	58
慶雲興	60
景雲飛	62
月如霜	64
壺中天	66
枯木心	68
金剛智	70
塞翁馬	72
坐忘矣	74
三摩耶	76

志於道	78
四海春	80
自在心	82
思入玄	84
子不語	86
思無邪	88
寂光土	90
守以静	92
出世間	94
春可樂	96
掌中珠	98
真善美	100
仁者静	102
水竹居	106
随处樂	108
数雜寿	110
清而美	112
雪月花	114

善知識	116
爽且明	118
大円鏡	120
濯枝雨	122
多即一	124
懶祭魚	126
淡如雲	128
知白身	130
頂門眼	132
泥中蓮	134
天如水	136
伝衣鉢	138
桐吟雨	140
道在迹	142
得其樂	144
德不孤	146
凶南翼	148
内外空	150

南山寿	152
如来藏	154
入木道	156
背水陣	158
白露寒	160
八斗才	162
飛羽觴	164
避三舍	166
風前塵	168
不如学	170
物外游	172
分余光	174
平生歡	176
壁中書	178
放下著	180
忘筌蹄	182
本来空	184
莫妄想	186

滿則覆	188
無一物	190
無声詩	192
明則誠	194
默如雷	196
門外漢	198
有為空	200
養其拙	202
樂琴書	204
麗沢契	206
弄清泉	208
和為貴	210
和氣動	212
(五十音順)	
『説文』	104

掲載古典碑帖一覧

殷・甲骨文	東周・石鼓文	後漢・北海相景君碑	後漢・石門頌	後漢・乙瑛碑	後漢・礼記碑	後漢・西嶽華山廟碑	後漢・曹全碑	王羲之・蘭亭叙	王羲之・集字聖教序 (唐刻)	王羲之・十七帖	北魏・中岳嵩高靈廟碑	劉宋・龔龍顏碑	北魏・張猛龍碑	北魏・敬使君碑	北齊・泰山經石峪金剛經	智永・真草千字文 (谷氏本)	虞世南・孔子廟堂碑
金文	說文	後漢	後漢	後漢	後漢	後漢	後漢	木簡・殘紙	王羲之	王羲之	北魏	北魏	北魏	東魏	北齊	智永	虞世南

〔建碑年〕	三八〇	一八四	一八五	一八五	一八五	一八五	一八五	三八五	三八五	三八五	三八五	三八五	三八五	三八五	三八五	三八五	三八五
-------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

褚遂良・枯樹賦	歐陽詢・九成宮醴泉銘	褚遂良・孟法師碑	唐太宗・晉祠銘	褚遂良・文皇哀冊	褚遂良・雁塔聖教序	歐陽通・道因法師碑	孫過庭・書譜	李邕・雲麾將軍李思訓碑	唐玄宗・石臺孝經	唐玄宗・鵠銘	顏真卿・多寶塔碑	顏真卿・爭座位稿	顏真卿・竹山連句	懷素・白叙帖	懷素・草書千字文 (千金帖)	柳公權・玄秘塔碑	蘇軾・赤壁賦	楊沂孫・篆書詩經	東晉・王羲之 (逸少)	東晉・王獻之 (子敬)	唐・懷素 (藏真)	唐・虞世南 (伯施)	唐・歐陽詢 (信本)
六三〇	六三〇	六四二	六四九	六五三	六五三	六五三	六八七	七二〇	七四五	七五二	七五二	七六四	七七四	七七四	七九九	八四二	一〇八三	一七八	二七六	三六五	三八八	三八〇	六三六

[illegible]

八〇五	一〇・八	七六七
八三三		七四四
九二八		八九四
		九六六
		二〇三七
		一八三一

三字名句墨場必携

阿伽陀

アガダ

陀羅尼集經

(仏語)

通解

- ① agadaの音訳。無病、健康　さらに不死を意味する語句といひます。そこから
② 藥一般特に解毒劑、不死の藥　③ 衆生の病疾をあまねく取り去る藥のこと。
(伽陀は、kathaの音訳で句、頌、偈などと約されます)

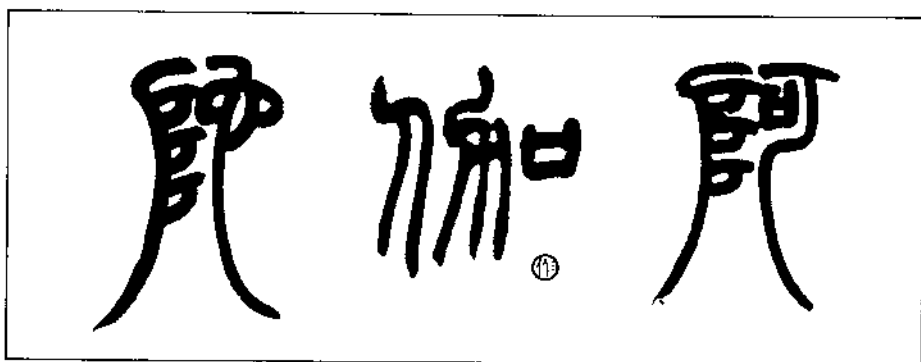
説文

阿　ア　会意　阜と可の合字。可は鍵形に曲がるから鍵形の台地。はざま、おもねる
伽　カ　形声　人と加の合字。梵語の音訳のために作られたという字。とぎ(和訓)
陀　ダ　会意　阜と它的の合字。它是長く伸びるの意で斜に傾いた地形。梵語ダに当る

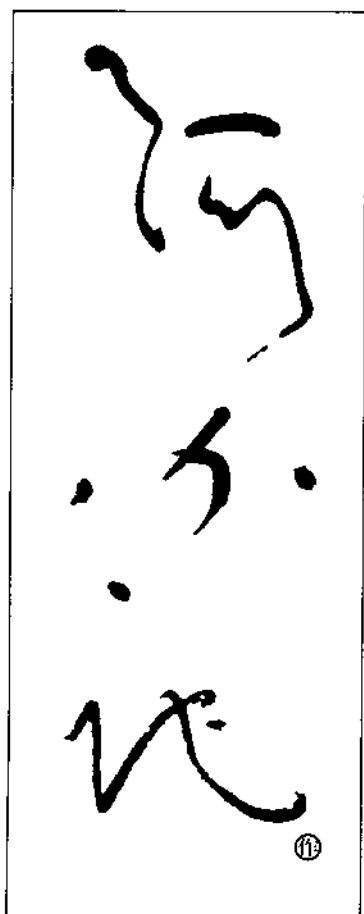
①趙之謙　小篆を近代風に構成する。暢達で原則に捕われない動きの多い作品

②吳昌碩　並列にならべた偏旁、柔らかな書線が快い。こせこせしない運筆も見習いたい

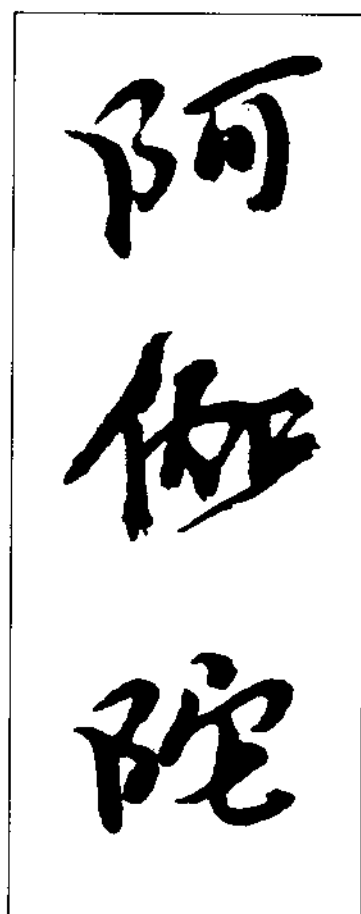
③良　寛　あたらしい感触で文字を書く。前例に拘らない作風に良寛の一面目がある



清·趙之謙（擬叔）



良寬



清·吳昌碩（俊卿）

案山子

アンザンシ

かし

傳燈録（面前案山子也不會）

（比喩・仏語）

通解

①案山は上が平らな低い丘のような山、その耕地で農作物を荒らす鳥獣を追うために立てた竹や藁で作った人形。鳥おどし。また、②立っているだけで何もできない人に譬えられます。

説文

案 アン 会意 宀、女と木の合字。肘^{ひじ}をのせて押さえる木の机。つくえ、あんずる
山 サン 象形 △型のやまを連ね描いたもの、△型の分水嶺。やま、物事の頂点
子 シ 象形 小さい子供の姿を描いたもの。こ、こども。十二支の「ね」に援用

- ①木 簡 巾一cmに満たない木片に、気負いのない筆使いで書く。絵画的な姿も楽しめる
- ②崑山廟碑 正体の隸書、漢隸第一といわれ書学の規範となるもの。厳しい構成を見る
- ③米 芾 筆鋒を弄ぶような運筆、そこに筆圧の変化を心ゆくまで楽しんでいる